

(11) 読者のページ

平成24年(2012年)9月6日(木曜日)

時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学
研究所副所長・教授



京都の私の自宅のそばに、化野念仏寺という寺がある。建立は空海にもさかのぼるといふから相当の古さだが、もともとこの化野という土地は、『徒然草』に「あだし野の露消ゆるるときなぐ」とあるように、遺体の捨て場だっ

たといわれる。いわゆる鳥葬のようなことがおこなわれていたようだ。

当時の人びとにとって、人の亡骸を運んでこの地に足を踏み入れるときの思いはどのようなものだっただろう。空海が遺骨を集めて寺を建てたというのも、なるほどという

草木国土悉皆成仏

人間も生命循環の中に

気がする。それでも、平時はまだよかった。問題は災害のあとなど、社会が大混乱した時だった。市中には行き倒れの死体が散乱したという。それを片づける職の人びとも亡くなるか、病に倒れてしまっているのだ。『方丈記』もその惨状を、多くの人があらためて

あとからは新たな生命が芽吹き、心の傷は現代の私たちの想像をはるかに超えている。東日本大震災は、しかし、多くの日本人に、そうしたことが過去のものでは決してないことを思い起こさせた。今年、『方丈記』800年にあたり、多くの人があらためて

私は「草木国土悉皆成仏」の発想の原点はここにあるのだと思う。最近の「里山」論や

状況を「変わりゆくかたち、ありさま、目もあてられぬ」と伝えている。飢饉は繰り返し社会を襲った。その時代を生きた人びとは、災いがいつわが身に降りかかるか気ができなかっただろうし、幸いに生きながらえても、生涯のうちにくらえその惨状を目にしなければならなかった。それを土に還り、

それを手にとったというが、恐らくは大震災への思いがあったからだろう。念仏寺は、今はただ観光地として知られるばかりだが、安置される何千という石仏は長い間に無縁仏となったものを明治期に集めて供養したものという。大きな災害の後、しかし時れ、思い継がれてきたことの結果なのだと思ふ。

執筆者略歴

◇さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「コシヒカリより美味しい米」(朝日新書)など。